

保育・教育系学生による 5 歳児とのオンライン交流活動の試み

川口 めぐみ¹

徳岡 大²

Attempt of Online Exchange Activities with 5-year-old Children by Childcare and Education Students

Megumi KAWAGUCHI and Masaru TOKUOKA

要約

本稿は、新型コロナウイルス禍であった 2020 年度に本学の学生と 5 歳児の園児とのオンライン交流活動の実践を報告し、その後の学生の学びや気付きから、オンライン交流活動での効果と今後の課題について考察するものである。

本活動では、オンライン環境ならではの障害が発生し、園児とのやりとりの難しさがああったが、言葉や動作を工夫するなど学生自らが課題を克服しようとする姿が見られた。また、活動を通して、子どもへの関わり方や保育・教育技術の獲得の必要性を含め、保育・教職に対するポジティブな意識の変容が見られた。

今後の課題としては、保育者養成校として、子どもと関わる際の配慮や技術の習得、ICT 活用技術の習得ができるよう指導していくことに加え、学生の学びを保障できる ICT 環境の構築が必要であることが示唆された。

キーワード：保育者養成，ICT，オンライン活動

Abstract

This paper reports on the practice of online exchange activities between students of Takamatsu University and kindergarten children of 5 years old in 2020, which was marked by the COVID-19 pandemic, and from the learning and awareness of this experience, the effects of online exchange activities and related future issues were considered.

In this activity, obstacles unique to the online environment occurred and it was difficult to interact with the kindergarten children, but the students themselves tried to overcome the problems by devising words and movements. In addition, through the

受理年月日：2021 年 7 月 30 日 ¹ 高松大学発達科学部講師 ² 高松大学発達科学部講師

activities, there was a change in positive awareness of childcare and teaching profession by the university students, including how to relate to children and the need to acquire childcare and educational skills.

As a future task, at a kindergarten, in addition to providing guidance so that students can better interact with children, acquire skills, and acquire Information and Communications Technology (ICT) utilization techniques, it was deemed necessary to build an ICT environment that can guarantee student learning.

Keywords: Early Childhood Education Facility, ICT, Online Activity

1. はじめに

1. 1 幼児期の教育における ICT の活用

文部科学省は、1985年に学校教育の情報化の必要性から ICT の環境整備について取り組みを始めた。2019年には、多様な子どもたちを誰一人として取り残すことのない、公正に個別最適化された学びの実現を目指し、「GIGA スクール構想」を打ち出し、小中学校の ICT 環境整備をより一層進めている（文部科学省、2019）。そして、2021年2月、文部科学省大臣が「GIGA スクール元年の始まり」を宣言し、2021年度より全国の小中学校では、教育の質の向上を図るため、一人一台端末の学びが本格的に始まっている（文部科学省、2021）。

幼児期の教育においては、2018年度から施行されている幼稚園教育要領において、初めて情報機器の保育への導入を公的に明確に位置づけられた（文部科学省、2017）。幼稚園教育要領（2017）の第1章総則第4節3指導計画の作成上の留意事項（6）情報機器の活用の中では、「幼児期は直接的な体験が重要であることを踏まえ、視聴覚教材やコンピュータなど情報機器を活用する際には、幼稚園生活では得難い体験を補完するなど、幼児の体験との関連を考慮すること。」と記載されている。幼児の情報機器の使用にあたっては、「視聴覚教材や、テレビ、コンピュータなどの情報機器を有効に活用するには、その特性や使用方法等を考慮した上で、幼児の直接的な体験を生かすための工夫をしながら活用していくようにすることが大切である。」と記載されており、安易に使用するのではなく、保育者は直接的な体験との関連を常に念頭に置いておくことが重要とされている（幼稚園教育要領解説、2018）。また、幼児の更なる意欲的な活動の展開に繋がるか、幼児の発達に即しているかどうか、幼児にとって豊かな生活体験として位置づけられかといった点などにも考慮し、使用する目的や必要性を自覚しながら活用することが求められている。また、これらのことについては、幼保連携型認定こども園教育・保育要領（内閣府、2017）にも同様の内容が示されている。

ICT 活用事例として、佐藤（2020）によると、散歩で出会った生き物や植物の写真を撮影し、園に帰って図鑑で調べたり、体操や表現活動の時間に自分の演技を動画で撮影し、

振り返りに活用したり、デジタル絵本として活用したりする保育活動が挙げられている。また、アプリを使って疑似体験をしたり遠隔地との交流をしたりするなど ICT が活用されている事例も報告されている（杉本，2017）。

しかし、糟谷（2019）の調査によると、保育実践の場面において、幼児期に情報機器を使わせたくないという保育者の否定的な意見も多く、園児自身が情報機器を操作する形で ICT の利用は非常に少ないことが明らかとなっている。その理由について、「園児の成長には実体験が必要」、「情報機器の使用は大人になってからでよい」という意見のほか、「機材不足」や「保育者の知識不足」も関係することが示唆されている。文部科学省は、2017年に、「園務改善のための ICT 化支援」、また、厚生労働省は2016年に、「保育所等における業務効率化推進事業」をそれぞれ掲げ、補助金を交付するなどして、幼児教育における ICT 整備を進めている。しかし、幼児期の教育での ICT の活用については、園の ICT 環境の整備はもとより、糟谷（2019）で示唆されるように保育者の活用能力の向上も必要であることが窺える。

1. 2 新型コロナウイルス禍における活動の制限

2020年2月末に新型コロナウイルス禍（以下「コロナ禍」と表記する）により、初等中等教育機関においては、文部科学省（2020a）による「新型コロナウイルス感染症対策のための小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における一斉臨時休業について（通知）」により、全国一斉休校を実施する事態となった。また、高等教育機関においても、大学構内への立ち入り制限や、対面授業を見送り、休校措置を実施したりリモートで授業を開講したりする機関が多くを占めた。文部科学省（2020b）の「新型コロナウイルス感染症対策に関する大学等の対応状況について」によると、2020年4月23日時点の調査では、全体の約9割の大学等において、学生を集めて行う通常の授業の開始時期等を延期しており、例年通りの時期に実施するとしている大学等でも、ほとんどが遠隔授業の実施を決定又は検討していたことが明らかとなっている。また、文部科学省（2020c）の「コロナ対応の現状、課題、今後の方向性について」によると、約9割の大学が「実験・実習・実技系科目への対応」に課題を抱えていることが示されており、人的な交流の機会が減少していることが窺える。本学においても、2020年4月対面授業が困難な状況に陥ることとなり、6月から新しい生活様式の中、対面授業は開始されたが、サークル活動など学生が複数名集まるような活動や、学外の人と関わるような授業や実習はもとより課外活動は厳しく制限がなされることとなった。

一方、保育園等においても、コロナ禍においては、通常の保育を実施することが困難な状況となった。厚生労働省（2020）は「新型コロナウイルス感染症防止のための学校の臨時休業に関連しての保育所等の対応について（第二報）」において、感染の予防に留意した上で、原則として開所することを通知した。また、園児や職員が罹患した場合や感染が拡大した場合においては、保育の提供を縮小して実施し、園児の登園自粛のお願いをすること、また、保育の提供を縮小しての実施も困難な場合、臨時休園を検討し、保育が必要

な子どもに対する対応も検討することも通知している。

令和2年4月に実施された全国私立保育園連盟（2020a）の『『新型コロナウイルス感染症に関する調査』報告書』によると、原則開園だが登校自粛を依頼していると回答している園が、3,147の回答園のうちの2,635園（83.7%）であった。また、保育所の抱える困難や不安として、半数以上の施設が衛生物資の不足や登園自粛に関する保護者との認識のズレを挙げている。この困難さに示されるように、調査時の園児の出席率は、ほとんどの場合で半数以下になっているが、10%以下から50%程度と市町村の開所方針によって異なることが示されていた。

その後、令和2年6月に緊急事態宣言解除（令和2年5月25日）後、上述した調査からの状況変化の把握を目的として実施された『『新型コロナウイルス感染症に関する調査2』～第1波感染期間を振り返る～報告書』（全国私立保育園連盟、2020b）では、園児の出席率は、8割以上となっている園が87.9%であり、平常時の登園状況に近づいていることが示された。また、開園方針についても、通常通り開園の施設が増加した。また、3月から5月の行事や保育内容の実施については、卒園式や入園式、誕生会等の一部内容の変更や時間短縮、園外保育や保護者会の中止といった対応をとった園が多いことが示された。

また、天野（2021）は、コロナ禍における保育所への要請、保育所の対応に関するアンケート調査をまとめ、さらに、5つの園の園長に対する聞き取り調査を実施した。聞き取り調査の結果から、保育の中でソーシャルディスタンスを守ることの困難さであること、その困難な状況下においても行事の見直し、衛生物資の確保、施設内の遊具や備品の洗浄や消毒、子どもの体調管理を徹底するといった対応によって保育を実施している実態がまとめられている。これらのことから、コロナ禍において、保育園等が保育の困難さを抱える現状であったといえよう。

1. 3 保育施設におけるコロナ禍での ICT を活用した取り組み事例

文部科学省（2020d）は、「幼稚園等再開後の取組事例集」の中で、コロナ禍において、幼稚園が ICT を活用した取り組み事例を報告している。報告事例として、園の担任紹介の動画の配信、遊びや手洗い歌や食育に関する動画配信、Zoom を活用した研修会や保護者への子育て相談の実施等が示されている。また、天野（2021）による園長に対する聞き取り調査では、登園自粛家庭に対する関わりや支援について、電話やメールでの安否確認や紙媒体による施設からの情報発信が多いことが示されている。また、これらの対応の半分以下の施設数ではあるが、Web ページやアプリを用いた施設から情報発信や動画配信などが行われていることも示された。また、登園自粛家庭の支援方法に関する自由記述について、対応分析を行った結果、家庭にいながら楽しめるような手作りおもちゃ等の配布や、Web 上で動画や情報の配信を行う支援、園庭開放のように子どもと施設の接点をもたせるような支援が実施されていることが示されている。また、静岡新聞（2020年10月7日掲載）によると、静岡市の私立こども園では、運動会での「密」を避けるため、保護者に対して動画での配信を行っている。

このように、園では ICT を活用して、園の様子を伝えたり遊びを提供したりする取り組みは比較的多く実施されているが、保育者を目指す学生と園児がリモートで交流したり、一緒に活動したりしたという事例は見当たらない。このような背景を踏まえ、本学では、保育者を目指す学生と園児とがオンラインで交流する活動を試みることにした。

本稿では、コロナ禍であった 2021 年 2 月中旬に本学の学生と 5 歳児の園児とのオンライン交流活動の実践を報告する。そして、その後の学生の学びや気付きから、オンライン交流活動での効果と保育者養成校としての今後の課題について考察する。

2. 園児とのオンライン交流活動の概要

2.1 オンライン交流活動を実施するに至った背景

本学発達科学部は、2015 年より、『「二十四の瞳」学習支援体験推進プログラム』¹と称して、小豆島島内の小学校、幼稚園・保育所・こども園で学習及び保育支援ボランティアを実施し、小豆島の教育・保育を支援する活動を続けてきた。2020 年度も例年通り小豆島の小学校や園に学生が出向き、ボランティア活動を実施する予定で準備を進めていたが、先述したとおり、新型コロナウイルスの影響により、活動そのものを中止せざるを得なくなった。しかし、将来保育者や小学校教諭を志望している学生が、幼児や児童と交流ができていない現状や、島内の園児が地域の方々や施設と交流ができていない現状を鑑み、リモートで学生と園児が交流する方法がないか模索することとなった。そのため、昨年度から本プログラムに参加している 2 年生と検討会を開催し、その結果、島内の小学校やこども園とネットワークを介するオンライン交流活動が提案された。そして、島内の小学校や保育・教育施設にオンライン交流活動の提案を行い、島内のこども園と活動することが決定された。本学にとっても学生にとっても園児とのオンライン交流活動の実施は初めての試みとなった。

2.2 参加者

参加学生は、高松大学発達科学部の 1, 2 年生 26 名（内訳：1 年生 14 名、2 年生 12 名）であり、保育者や小学校教諭、特別支援学校教諭を目指す学生である。

今回のオンライン交流活動に参加した 1 年生は、コロナ禍の中で入学しており、ボランティア活動等による幼児や児童と直接関わる機会を喪失していた。そのため、園児や保育者との関わりを初めて体験する学生が大半であった。参加の主な理由は、子どもたちと関わりたいから、保育者や教員の姿から子どもたちとの関わり方について学びたいからであった。2 年生は、昨年度『「二十四の瞳」学習支援体験推進プログラム』に参加した学生であった。

『「二十四の瞳」学習支援体験推進プログラム』は、「初年次より、園児、児童に接し、

¹ 2020 年度は、「香川県若者県内定着促進支援補助金事業」の助成金で実施した

教育現場を見聞し、実地に経験を積むことによって、教職キャリアへの強い動機づけとなる。」ことを目的の一つとして掲げているため、本活動では、1年生が主の活動を実施し、2年生が指導や助言を行うという形式をとった。

オンライン交流活動の実施園は、香川県小豆島町の私立こども園の5歳児29名（職員5名）であった。

2.3 実施環境

(1) 実施場所

学生は、本学キャンパス内にある50名規模の演習室でオンライン交流活動を行った。

(2) 接続環境

Wi-Fiを介してインターネット接続した。オンライン交流活動にはGoogle Meetを用いた。

(3) 主な接続機器

主に使用した機器は、ノート型パソコン2台、GoPro 1台、USBマイク1台、演習室に付属しているTVモニター（65インチ）1台であった。ノート型パソコン1台は、TVモニターと有線接続して、TVモニターに子ども園からの映像を映しだし、学生が子どもの様子を見ながら交流できるようにした。もう1台のノート型パソコンは、GoProとUSBマイクを接続した。GoProはパソコンの外部カメラとなるように接続し、このカメラに映る学生の様子が子ども園に送信されるようにした。

双方の接続環境を整えるために、事前に接続イメージ図をこども園に送付して情報共有を行った（Figure 1）。

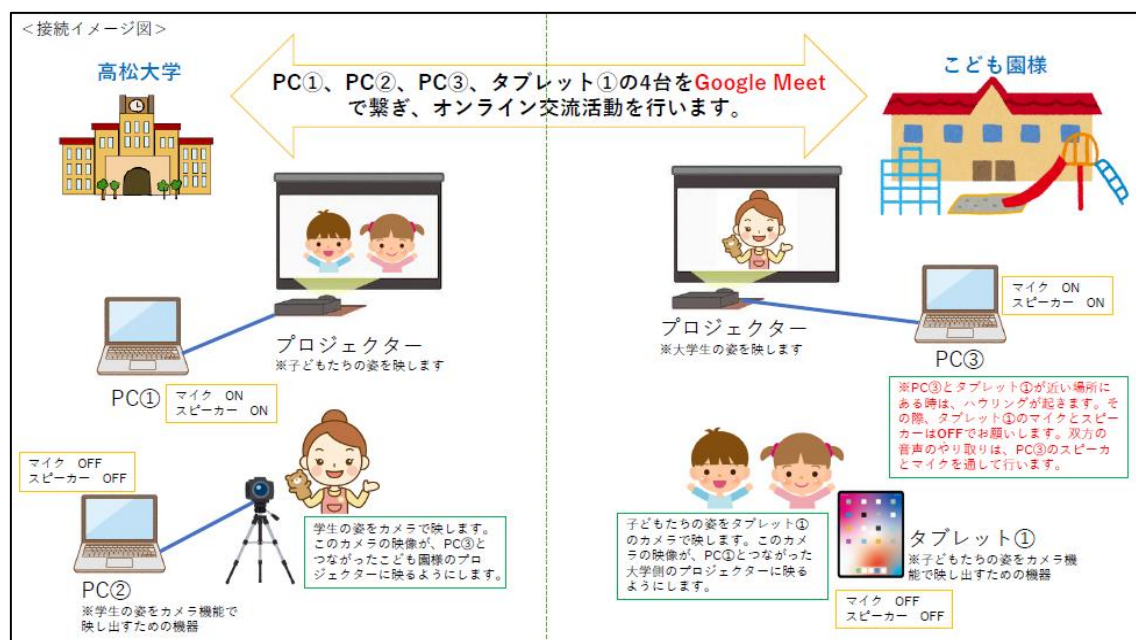


Figure 1. 双方の接続イメージ図（筆者が作成）

2. 4 活動の概要

2. 4. 1 活動全体の流れ

この活動についての主なスケジュールは以下の通りである (Table 1)。2021年1月中旬に参加学生の募集を行い、その後、学生が主体となりオンライン交流活動実施に向けて活動を開始した。2月18日の本交流活動に向けて、こども園との連絡は教員が行い、活動の内容については学生が考案し、準備を進めた。こども園との最初の接続を行ったのは、2月8日であり、その際は、映像や音声等の接続状況を確認し、また、学生は教室のレイアウトやカメラの立ち位置などを確認した。その後、2月9日に、本交流活動の事前交流として、実際に学生と園児が交流する機会を設定し、5歳児の子どもの姿を把握したり、リモートでのコミュニケーションを図る時の配慮事項などを確認したりした。その後は、本交流活動に向けて、プログラム内容の再検討や製作物等の準備を進め、接続環境を整備しながらリハーサルを重ねていった。本交流活動を終えた後に、参加者全員で振り返り会を実施し、活動は全て終了した。

Table 1 オンライン交流活動の主な日程

日程	活動の主な内容
2020年12月下旬	活動内容についての検討会
2021年1月中旬	活動内容の説明会及び参加学生募集
～2月初旬	オンライン交流活動に向けての準備
2月8日午後	接続リハーサル (本学⇄こども園)
2月9日午前	★プレ交流活動実施 (約30分間)
～2月中旬	本活動に向けての準備及びリハーサル
2月18日午前	★本交流活動実施 (約1時間)
2月19日	振り返り会

2. 4. 2 2021年2月9日：プレ交流活動の内容

2月9日に実施されたプレ交流活動のプログラムは以下の通りである (Table 2)。

プレ交流活動の主な目的は、三点である。一点目は、本学生と園児は初対面であるため、自己紹介を兼ねた挨拶をし、対話やダンスを通して園児との距離を縮めることである。二点目は、本活動に向けて接続機器の確認や園児と交流をする上での配慮点について把握することである。三点目は、園児が本活動に向けて期待を膨らませることができるように、本活動の告知を実施することである。

プログラムでの主となる活動は、子どもたちと一緒に「パプリカ」の曲の振り付けを考え、全員で踊ることと、本学のマスコットキャラクターである「たーちゃん」とのやり取りを通して交流を深めることであった。

Table 2 プレ交流活動のプログラム

時間	内容
9:30~10:00	双方接続, 接続環境の調整・確認
10:00	園児との交流活動開始 ①挨拶・自己紹介 ②子ども達と「パプリカ」を踊ろう! ③「たーちゃん」と仲良くなろう! ・「たーちゃん」登場, 質問タイム ④本交流活動に向けての告知
10:30	園児との交流活動終了
10:30~	接続環境についてトラブル等がなかったか確認 振り返り会

2. 4. 3 2021年2月18日：本交流活動の内容

2月18日に実施された本活動の内容は以下の通りである (Table 3)。

本交流活動では、「たーちゃん」と一緒にする手遊びや、「パプリカ」のダンスを取り入れ、プレ交流活動との流れを意識してプログラムを構成した。主となる活動は、ペープサートを用いた「ももたろう」の紙芝居と宝探しであった。宝探しは、こども園の保育室を活用して、子どもたちが実際にコインや宝箱の鍵を探すなどの活動をした。宝探しに必要な宝箱やコイン、鍵などについては、学生が事前に作製して郵送し、保育室内に隠してもらおうようこども園に依頼した。

Table 3 本交流活動のプログラム

時間	内容
9:30~10:00	双方接続, 接続環境の調整・確認
10:00	園児との交流活動開始 ①オープニング ・「たーちゃん」登場 ・手遊び ②ペープサートを用いた紙芝居「ももたろう」 ③〇×ゲーム ④宝探し ⑤「パプリカ」を踊ろう
11:00	園児との交流活動終了

3. 結果と考察

3. 1 オンライン交流活動を通しての学生の学びと気付き

オンライン交流活動を実施後、振り返り会を実施した。参加学生による振り返りシートの記入内容を基に、以下の視点でまとめた。

3. 1. 1 活動開始から振り返り会終了までの活動全体

まずは、約1か月間の活動全体を振り返っての学生の感想を省察する。

学生から一番多かった感想は、Table 4にも記載があるように、「子どもたちが楽しそうに活動する姿を見られて嬉しかった」、「楽しく活動できた」という前向きな感想であった。準備の段階で、「どうしたら子どもが喜んでくれるんだろう」、「子どもたちが楽しめる遊びって何かな」など、学生同士で話し合ったり専門書やインターネットを活用して調べたりする光景が多く見られた。特に1年生にとっては、子どもたちと関わる機会がほとんどなかったため、子どもの姿をイメージすることが困難であったと考えられる。その中で、実習経験のある2年生や保育経験のある教員からの指導や助言を受けながら準備を整えていた。そこに加え、初めてのオンラインでの子どもたちとの交流であったため、直接子どもと関わるができない難しさを常に抱えていたと考える。それは、「「オンラインはできても、交流はできない」とさえ、考えるときもありました。」という学生の言葉からも示唆される。後述するが、オンラインならではの課題は多くあり、筆者も準備を進める段階で大きな不安を抱きながら活動を支え、学生の指導にあたっていた。実際に画面の前に立ち、直接出会ったことがない子どもたちに遊びを提供する、一緒に活動を楽しむという行為は、大きなプレッシャーだったに違いない。そういったことを踏まえると、実際に子どもたちが楽しむ姿が見られた感動はひとしおだったと考えられる。

次に多かった感想は、「みんなで協力して一つのものを作ることの楽しさや達成感」、その次は、「協力することの大切さと難しさ」であった。コロナ禍であったため、複数の学生が一つのプロジェクトを遂行していくことは、大変困難なことであった。現に、2020年度は、本学でもグループワーク活動を授業で取り入れることが激減し、模擬保育などを実施することは不可能な状態にあった。個々が学習に取り組むというスタイルの中、一つの目的に向かって学生同士が話し合ったり製作をしたりする集団活動を通して、協力すること、情報を共有すること、達成感などを感じることができたのであろう。

1年生の感想の中には「是非今後に生かしたい」、「もっと専門的な技術や知識を習得したい」、「これまでは人前で話すことは苦手だったが今回の経験で少しできるようになった」、「先生として責任を持って行動しなければならないと感じた」といったものもあり、大学の初年次教育としての成果は非常に大きかったと考えられる。

また今回のオンライン交流活動は、昨年度の経験者である2年生をリーダーとして起用したが、彼らが1年生に対して幼児の特徴や接し方などを指導し、また、活動の指導者となるような体制となった。その結果、事後の振り返り会において、1年生からは2年生にいろいろ教えてもらえたことに感謝を示したり、2年生のようになりたいといった発言が見られた。2年生からは集団活動をリードする難しさや、協力して活動することによって感じられるやり甲斐に関する発言があった。これらの発言から、今回の体制によってそれぞれの学年が、互いにポジティブな影響を与えたことが示唆される。

Table 4 活動全体を通しての感想 (振り返りシートより一部記載)

- ・みんなでパブリカを踊った時、子どもたちが楽しそうに踊ってくれたので、私も楽しみながら、活動できた。
- ・子ども達も自分も楽しくできた。子ども達の反応も良くスムーズに会を進めることができた。
- ・どのような製作や活動をする子ども達が楽しくできるのか考えるのが難しかった。
- ・接続や動きの部分で不安があったが喜ぶ子どもたちの姿を見て嬉しさと達成感を得ることができた。
- ・紙芝居の製作を担当したが、どのようなものにすれば楽しんでもらえるかを考え、結果的に登場人物がペープサートで動く紙芝居を作り、その評判がよかったので嬉しかった。
- ・子どもたちがあんなにたのしそうに活動してくれるとは思いませんでした。画面越しで子どもたちには、テレビを見るような感覚があるのではないかと計画しているときに、すこし考えていました。「オンラインはできても、交流はできない」とさえ、考えるときもありました。まさか、画面が繋がっただけで、手を振ってくれたり、話かけてくれたりするとは思いませんでした。子どもたちが楽しく活動してくれたからこそ、私たち学生側もたのしく活動することができたのだと思います。
- ・時間がない中で、ギリギリまで内容がさだまっていない部分もあったり、オンライン環境が不安定だったが、子どもたちが楽しんでくれていて、本当によかった。こども園の先生方も、なれない活動でご迷惑をかけてしまったはずなのに、御礼のメッセージや感謝の言葉をいただき、とても嬉しかった。
- ・子どもたちと意思疎通をとることが難しかったが、子どもたちがしっかり応えてくれたときや、子どもたちの笑顔を見ることができたのは、本当によかったと思う。
- ・子どもがかわいかった。
- ・みんなで協力して1つのものを作ることで達成感や楽しさを味わうことができて良かった。
- ・大人数で一から始める活動は初めてだったので「協力する」という難しさを痛感した。初めてのことばかりだったが、とてもやりがいのある活動だった。
- ・準備する時間がないなか、協力して製作物の作成や台本の作成ができました。
- ・紙芝居の時にナレーションの人が促さなくても、自分たちから声を出して応援してくれる姿が見られて嬉しかった。

3. 1. 2 「オンライン」での交流活動

先述した通り、学生にとってオンラインでの園児との交流は初めてであったため、目の前に子どもたちがいない、子どもたちと直接触れ合えないというオンライン環境だからその気付きや学びがあったようである。

参加した学生の約90%が、「オンライン上でコミュニケーションを取ることに難しさ」に気づいたようである。それは、「オンラインならではの難しさを感じた」、「直接ふれ合うのとはまったく違った」などという意見から読み取ることができる (Table 5)。その「難しさ」は、直接子ども達と触れあうことができない画面越しの状況で、どのようにコミュニケーションをとるのか、ということに集約されるであろう。その難しさを生み出している要因は、「子どもと直接触れ合えない」というリモートでの環境の問題もあるが、「タイムラグの発生」、「音声途切れる」、「映像途切れる」などのICT環境上の問題が多くを占めていた。

Table 5 オンライン交流活動実践後の学生の学びや気づき（振り返りシートより一部記載）

- ・オンライン交流では、初めてのことで要領がわからず、トラブルが起きた時に対応がきかないことが多かった。
- ・オンラインというカメラや画面を通しての交流で、何に留意しなければならないのか、どこまでが可能で、どこからが不可能なのかのバランスを取ることが難しかったです。
- ・対面ではなく、オンラインのためコミュニケーションが取りづらかった。
- ・特に音声が遅れて聞こえるため直接ふれ合うのとはまったく違った。
- ・オンラインは、直接会うよりラグなどがあって聞こえにくく伝わりにくいと感じました。
- ・オンライン交流ではラグ等の影響で子どもたちとうまくコミュニケーションがとれなかったりした時にとっさに言葉が出てこず、ただ子どもたちの反応を待つだけになってしまった時があったので、そういった時の対応もしっかり自分で考えられていたらよかったと思った。
- ・子どもたちと初めて交流したが、オンラインならではの難しさを感じた。特に接続が切れたときの対応の仕方や、画面越しに子どもたちの表情や言っていることをくみとる力が必要だなと感じた。
- ・子どもたちに返事を促す時に、ジェスチャーがあると音声とぎれていた時にも伝わりやすかったと思う。
- ・紙芝居の登場人物を動かす役目だったが、オンライン交流だと向こうに伝わるまでの時間に差ができてしまったり、上手くつながらず画質が良好ではなかったりしたので、大きめに動かす、ゆっくり動かすことを心がけた。
- ・1番難しかったのは接続が途切れ途切れになった際に相手方とのタイムラグを考えながら、こちらの声が聞こえているかを確認することです。聞こえない際には、アドリブで挙手してもらおう等の対応ができた。大切なのは子どもたちのアクションに合わせることで、子どもの声をよく聞いて反応をみることなんだと思いました。
- ・実際に合うことができなかつたので、生で子ども達の反応を見ることができず、反応に困った。タイムラグがあり、会話があまりできていなかった。キャッチボールができていなかった。
- ・私は主に司会、進行を担当することが多く、特に子どもたちとコミュニケーションを取る立場にあつたので、そこが難しい所だった。子どもたちは、私たちの問いかけ一つ一つにしっかりと応えようとしてくれていたので、もっと声を聴くようにしたいと思った。
- ・顔は見えていてもやりとりをすることは難しいのだと感じた。そのため、ゆっくりはっきりと話すことや聞いている時も耳に手をあてるジェスチャーをつける等配慮が必要であると学んだ。顔が見えても画面越しで距離感を感じてしまうと感じ、動きは大きくジェスチャーをつけて子ども達が話したくなるよう引き出す力を身につけないといけないと感じた。
- ・音声トラブルなどオンラインではないと起こらないトラブルの中で、間を繋ぐ司会の人が大変だなあと感じた。
- ・先生方は保育士なのにも関わらず、機器の設定などしっかりできていて、将来このような力を身に付けなければならないなど感じた。
- ・実際にオンライン交流をしてみて、可能な範囲は広いものだと感じました。

そのような環境上の問題に対応するための視点として、「オンライン上でのコミュニケーションの取り方の工夫」が読み取れる言葉を振り返りシートより抽出した（Table 6）。その結果、「目の前の子どもの姿に合わせて」という意味に類似する言葉を使用していたのは、全体の約40%だった。学生のペースで活動を進めるのではなく、画面越しの子どもの発言や表情、動作をしっかり観察し、こちらの言動が伝わっているのか確認をしながら活動を進めていくことの大切さに気付いたようである。そのほかには、「ゆっくりはつき

り話す」、「間合いを取る」、「ゆっくり大きく動作する」、「ジェスチャーを使う」などという言葉が抽出された。タイムラグや音声の不具合等接続環境が不安定な場合、早口な言葉や素早い動きは、画面越しの子どもたちにはうまく伝わりにくいようであった。そのため、言動はゆっくりと丁寧に、音声途切れた場合を考慮してジェスチャーやホワイトボードを活用するという工夫をすることが挙げられていた。

また、その他の学生の気付きとして、もっと ICT 機器を活用できるようにならなければならないという意見もあった（10%）。先述したとおり、幼児教育においても ICT の環境整備が進められており、ICT を活用した保育も少しずつ実施されている。そういったことを踏まえると、保育者や教員を目指す学生にとって、ICT 機器の活用能力向上は必須であり、その指導については、保育者・教員養成校の責務といえる。

保育者や教員を目指す学生にとっても、ICT 機器を用いた教育や保育の在り方を考える一つのきっかけとなったと考えられる。学生の振り返りシートからも「情報機器を扱える力を身に付けていかなければならない」、「オンライン交流ができたことで、可能性が広がった」など ICT 活用を前向きに捉える意見が見られた。小学校においては一人一台端末の学びが始まっており、また、保育業界においてもタブレットの活用が広がりつつある中で、ICT 機器の活用が今後切っても切り離せない状況になるだろう。

Table 6 オンライン上でのコミュニケーションの難しさに対する要因と対応策
(振り返りシートより抽出)

カテゴリー (頻度)	内容 (頻度)	カテゴリー (頻度)	内容 (頻度)
コミュニケーションを取ることの難しさ (18)	タイムラグの発声 (7)	対応策 (26)	子どもの姿に合わせる (10)
	音声途切れる (7)		ゆっくりはっきり話す (4)
	映像途切れる (2)		間合いを取る (4)
	直接子どもと触れ合えない (2)		大きくゆっくり動く (3)
			ジェスチャーを使う (3)
			ホワイトボードの活用 (2)

3. 1. 3 園児との交流活動

最後に、約1ヶ月にわたる園児との交流活動を通して、学生が気付いたことや学んだことを省察する。こうした園児との交流活動によると思われる学生の気付きや学びの一部を Table 7 に示した。これらの内容は概ね以下の三点にまとめられると思われる。

まず、一点目は、「子どもへの関わり方」である。多くの学生から「子どもたちに伝わるように、話したり動作したりすることの大切さを知った」、「保育を行うためには、子ども達の反応が大切だと感じた」という内容に類似する意見が多くあった。学生にとって、子どもと関わる機会をもてたことにより、子どもの具体的な姿を実際に見ることができた

反面、学生の予想とは違った子どもの姿に戸惑いを感じたに違いない。交流活動に向けてのリハーサルでは、司会を担当する1年生に向けて2年生から「その言葉は子どもにとって難しい」、「子どもに語りかけるように話す」、「言葉だけではなく楽しそうな表情や動作をする」など指導や助言があった。また、振り返りシートからも子どもとの具体的な関わり方について、「話し方、所作をしっかりと身に付ける」、「ジェスチャーを取り入れるとよい」、「声のトーンに気をつける」などの意見が挙げられていた。今回の交流活動を通して、子どもの気持ちをくみ取って子どもの目線に立つことの大切さや子どもへの言葉かけや援助方法など、子どもと関わる保育者にとって必要な姿勢について考える機会になったのではないだろうか。

二点目は、「保育・教育の技術の獲得」である。保育者は、子どもを保育する上で様々な知識と技術が求められる。その技術の一部として、保育教材の製作や演じ方、手遊びや弾き歌い等の遊びの技術が必要となってくる。学生からは、「子どもの前で話せる力を身に付けたい」、「子どもに見せるものは、ペープサートのよう動きをつける」、「製作の技術を身に付ける」、「子どもたちに喜んでもらえるような、遊びの引き出しを増やしたい」などの意見が挙げられており、保育者や教員にとって必要な技術獲得の必要性を感じている学生が多かった。活動を通して保育者としての専門性を考えるきっかけになったのではないだろうか。

三点目は、「保育・教職に対する意識の変容」である。学生の意見として「早く実習に行きたい」、「ここでの学びを実習やボランティア活動に生かしたい」、「責任を持って子どもと関わることの大切さを知った」、「理想の教師像が考えられた」、「コロナ禍でもできることはあるということに気づかされた。オンラインで活動する機会があれば、楽しい企画ができるようにしたい。」など、保育や教職に対して前向きに進もうとする意識の変容が見られた。社会の状況が混沌としている中で、自分たちが実際に子ども達と関わり、子どもや保育者の笑顔が見られたことで、地域や社会の役に立てることを実感でき、保育者や教員になるための意識が高まったのだと考えられる。特に1年生にとっては、教育・保育現場との組織的な交流は初めての機会であり、間接的ではあるが子どもたちと接し、また保育者の姿を画面を通して見ることは、保育・教職に対する意識を維持、向上させることに役立ったと推察される。

Table 7 園児と関わったことでの学生の学びや気づき（振り返りシートより一部記載）

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・こちらのペースではなく、子どもたちのペースに合わせて、活動を進めていくこと。・オンラインでなくても子どもと上手くやり取りをしながら活動を進めることが大切と学びました。・対面で子ども達と活動する時にも、ジェスチャーは積極的にとり入れていくと良いと思った。・子どもたちに伝わるように、話したり動作したりすることの大切さを知った。・保育を行うためには、子ども達の反応が大切だと感じた。そのためには時間の取り方や会話のトーンを考えなければいけない。一方的に話すのではなく子どもからの反応が得られるような会話をしなければ子どもは楽しめないと感じた。 |
|--|

(Table 7 続き)

- ・細かい所作や話し方を指摘してもらうことで意識できるようになった。
- ・今回の経験で、子どもたちとの関わりや反応から、子どもたちの関心があること、知っていることに気付き、同じ年齢の子どもと関わる際に意識して会話に取り入れたい。
- ・経験も知識も足りず、子どもたちとの関わり方について大学で学ぶ機会もあると思うので、知識を学習し、実践していきたいです。
- ・紙芝居を読むだけでなく、ペープサートを用いて動かすと、子どもたちはより見入ってくれるし、喜んでもらえるということを実感した。実習やその他の保育の場面で活かしたいと思いました。
- ・見えやすくきれいに書くということに慣れてないので、これを機にきれいな字を書く練習をしたいと思います。
- ・子ども達を楽しめるように、喜んでもらえるようにはどんな工夫や配慮が必要かを念頭に置いて考えることは重要だと思う。そのため、実習の際もしっかり準備した物を提供できるよう、これから色々なアイデアや企画力を高めていきたい。
- ・製作の技術などを学ぶことができたので、さらに学びを深め、今後の実習にも生かしたい。
- ・子どもたちに喜んでもらえるような、遊びの引き出しを増やしたい。
- ・司会の際にも、どの問いかけにも一生懸命答えてくれる姿を見て、早く実習に行きたいと思った。
- ・私達が言ったことを、先生が子ども達にはっきり代弁してくれている様子を見て、自分の中の教師像が具体的になった。
- ・まだ実習が始まっていないので幼稚園内の子どもの様子、先生の子どもに対する態度や遊びを通して子どもたちが、どのような反応をするのかを実際見たことがなかった。でも、オンライン活動で私たちがパブリカを踊ったり、紙しばいをしたりすると、子どもたちは素直に喜んでくれてとても良い笑顔を見せてくれた。私たちがしている活動が子どもたち、先生たちの笑顔の理由になっていることに感動した。
- ・子ども達にとって私達も先生であったということ。そのため、責任をもって行動しなければいけないと感じた。
- ・私たちが一生懸命準備したことは幼児にも伝わっていることはしっかりわかったので、これからは誰か（子どもたち）のために頑張りたい。
- ・今回のオンライン交流を通して、コロナ禍でもできることはあるということに気づかされました。オンラインで〇×ゲームをしたりみんなでダンスを踊ったりすることができることが分かったので、今後活動する機会があれば、もっと楽しい企画ができるようにしたいです。
- ・活動中、緊張で言葉が出てこないことが何度もあったので、そういった場への慣れや活動の経験が大切だと実感した。より一層、積極的に大学等の行事、ボランティアに参加していきたいと思う。

3. 2 オンライン交流活動が与えた子ども園への影響

一点目の効果として、園児が園外の他者と関わりが持てたことが挙げられるであろう。先述の通り、コロナ禍においては、こども園においても遊びや活動に制限があり、園児が思いっきり遊ぶことや他者と交流することが不足している状況が続いていた。このような中で、オンラインではあるが、学生と繋がることができたことは、園児にとっても良い体験をすることができたのではないかと考える。現に、5歳児の担任からは、「交流は不足している状況でとても助かった。園児達が大いにはしゃいでいる光景は非常に喜ばしいことであった。職員にとっても子どもたちにとっても貴重な時間だった。」という言葉が頂いている。幼稚園教育要領解説（2018）では、「幼稚園の教師は、遊びの中で幼児が発達し

ていく姿を、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を念頭に置いて捉え、一人一人の発達に必要な体験が得られるような状況をつくったり必要な援助を行ったりするなど、指導を行う際に考慮することが求められる。」と示されている。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の一つである「社会生活との関わり」では、5歳児は、地域や園外の人との関わりを通して、社会とのつながりなどを意識するようになっていくため、園児が楽しみながら体験できるように各園での工夫が期待されている。今回のオンライン交流活動では、園児にとって島外ではあるが同じ県内の学生と楽しみながら関われる良い機会になったと考える。

二点目は、ICTへの技術的な成果が得られたことである。こども園ではすでに、オンライン会議を取り入れたり、保育の中で園児にタブレットを活用させたり先駆的な取り組みを実施している園であった。しかし、他機関と連携したオンラインでの保育活動は新しい試みであり、実施できるまでにICT機器の接続などに大変困難があったようである。しかし、本学からの技術提供や試行錯誤を実施した結果、技術的な成果が感じられ、そして実施の結果「できる」という見通しにつながったようである。文部科学省がICT機器の導入を加速していることも鑑みると、ICTを活用した保育は今後増加していくと予想される。それに伴い、保育者にはICT機器の活用技術の向上が求められるであろう。今回のオンラインでの保育活動は、こども園にとって今後の活動を大きく広げるきっかけになると考えられる。

3.3 今後への取り組みと課題

今回の取り組みは、コロナ禍であっても、学生に教育・保育に関わる活動の場を提供することができること、またリモート交流であっても、学生にとっては大いに学ぶ機会となるということが示唆された。デジタル化が求められる昨今、今後に生かせる活動となったと考えられる。また、学生にとって、ICT機器を用いた保育について具体的に考える良い機会にもなったと思われる。今後も、子ども達と直接的な交流活動と並行しながら、ICT機器を活用したリモートでの交流活動の場を作っていきたい。そのうえで、今回のオンライン交流活動で得られた課題は大きく三点挙げられる。

一点目は、保育職を目指す学生の子ども達と関わる際の配慮や技術の習得である。今回の活動で、学生からは、子どもと関わる難しさや保育技術の未熟さが挙げられていた。参加学生が、まだ保育の専門的な授業を履修していない1年生であるということ、また、コロナ禍で様々な活動が制限されている現状を考えると、やむを得ないことではあったが、保育職を志す学生にとって、習得すべき必要不可欠な力である。今後、講義の中で、事例を検討したり模擬保育を実施したりすることを通して、専門的知識や技術が高められるよう指導内容を検討していきたい。

二点目は、学生のICT活用技術の習得である。今回のオンライン交流活動では、園との調整だけでなく、ICT機器の設定等のインフラに関わる準備は、すべて大学教員が行った。今後、学生が社会に出て、実際に保育場面でICT機器を用いることを考慮すると、

ICT 機器の準備段階から学生も関わっていく必要があるだろう。残念ながら、現段階では、本学の教員も含め、学生の ICT 活用能力はまだまだ高いとは言えない。学校を取り巻く ICT 環境は急速に変化しており、社会において求められる情報リテラシーも高度化する中で、これからの幼児教育や学校教育を支える学生の、ICT に関する知識の習得や活用能力が向上できるよう、保育者・教員養成校として指導していく必要がある。

それに加え、2022 年度から教職専門課程が改訂に伴い、「各教科の指導法（情報通信技術の活用を含む。）」以外に、「情報通信技術を活用した教育の理論及び方法」など情報機器活用に関する科目が導入されることを踏まえると、学生の ICT 機器の活用技術の習得に合わせて、それらに関する評価方法についても検討する必要があるだろう。

三点目は、学生の学びの環境の構築である。今回のオンライン交流活動では、接続の不安定さのために、映像のタイムラグが生じたり、映像や音声が途切れたりするといったことが生じた。学生が子どもとの交流をより円滑にできるような、安定したネットワーク接続環境を準備しておく必要があるだろう。

また、本学では大学内の限られた教室でしか Wi-Fi で学内ネットワークに接続できず、特定の教室内で可能な活動に限られた。学内にある自然環境（ビオトープや芝生の広場）を生かした活動も可能にできるよう学内ネットワークに接続できるポイントを増設する必要もあるだろう。

謝辞

本稿の実践の中でオンライン交流活動に参加頂き、多大な協力を頂きました小豆島町の私立こども園の職員の皆様や園児の皆様に対し、心より感謝の意を表します。

引用文献

- ・天野 珠路（2021）コロナ禍における保育所の対応とその課題 ―子どもと保護者のケアを担う― 鶴見大学紀要, 58(3), 13-20
- ・糟谷 咲子（2019）幼児教育・保育施設における情報化の現状と課題についての一考察 岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要, 41-56
- ・厚生労働省（2020）新型コロナウイルス感染症防止のための学校の臨時休業に関連しての保育所等の対応について（第二報） 令和 2 年 4 月 1 日
- ・文部科学省（2021）萩生田文部科学大臣メッセージ「1 人 1 台端末の安全・安心な活用について」 令和 3 年 2 月 10 日
<https://www.youtube.com/watch?v=8cBnIHxhF8M>（令和 3 年 7 月 29 日閲覧）
- ・文部科学省（2020a）新型コロナウイルス感染症対策のための小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における一斉臨時休業について（通知） 令和 2 年 2 月 28 日

- ・文部科学省（2020b）新型コロナウイルス感染症対策に関する大学等の対応状況について 令和2年4月24日
- ・文部科学省（2020c）コロナ対応の現状、課題、今後の方向性について（今後の国立大学法人等施設の整備充実に関する調査研究協力者会議（第5回）令和2年9月24日資料2-1）
- ・文部科学省（2020d）幼稚園等再開後の取組事例集 令和2年9月7日
- ・文部科学省（2019）GIGAスクール構想の実現へ 令和元年12月19日
- ・文部科学省（2018）幼稚園教育要領解説 フレーベル館
- ・文部科学省（2017）幼稚園教育要領 平成29年3月告示
- ・佐藤 純子（2020）〈領域〉環境ワークブックー基礎理解と指導法ー 萌文書林
- ・内閣府 文部科学省 厚生労働省（2017）幼保連携型認定こども園教育・保育要領 平成29年3月告示
- ・静岡新聞（2020/10/7）「育ちの機会」密避けて…運動会遊技、応援手探り 静岡県内保育園・幼稚園
- ・杉本 正和（2017）つるみねのデジタル保育 新幼児と保育 12・1月号, 52-53 小学館
- ・全国私立保育園連盟（2020a）『新型コロナウイルス感染症に関する調査』報告書
- ・全国私立保育園連盟（2020b）『新型コロナウイルス感染症に関する調査2』～第1波感染期間を振り返る～報告書